

イエス様の復活を祝い、7回目の日曜日を迎えたのですが、先週の木曜日がイースターから40日目にあたりました。使徒言行録1章3節の（今日の使徒書では省略されていますが）「イエスは苦難を受けた後、御自分が生きていることを、数多くの証拠をもって使徒たちに示し、四十日にわたって彼らに現れ、神の国について話された。」という言葉と、そしてそれに続いて、今日の使徒言行録にあるように、天に昇られた、ということで、教会は、復活から40日目を昇天日とし、その後に来る日曜日を「昇天後主日」としています。そして、残された弟子たちが、ただ天を見上げて、みなしごのように悲しんでいるのではなく、次の日曜日に約束の聖霊が降るために、祈ったように、私たちも、先駆けとして天に昇られたキリストの後に従い、神様の所へ行けるように、特禱で、祈っているわけです。

私たちはイースターから、イエス様の復活について、いろんな出来事を通して学んできましたが、キリストの昇天という出来事は、イエス様の復活の、最後の仕上げのようなものではないか、と思います。

昇天日に、それではどんなことが起こったのでしょうか。

今日の使徒書、使徒言行録第1章9節には、「こう話し終わると、イエスは彼らが見ているうちに天に上げられたが、雲に覆われて彼らの目から見えなくなった。」と書かれています。「イエス様が、見えなくなる」というのが、復活の最後の仕上げではないか、と思うのです。

ある聖書学者は、世界の歴史をキリスト教の視点から見ると、三つに分けられる、と言います。「イスラエルの時」「キリストの時」「教会の時」の三つです。「イスラエルの時」とは、旧約の時、救い主を待ち望んでいる時代、律法の時代ということになるでしょう。そして、イエス様が来られ、救い主としての生涯を送り、十字架にかけられて死んで、復活し、天に上げられる時までが、キリストの時であって、その聖書学者は、このキリストの時を「時の中心」と呼びました。救い主が私たちの目の前に姿を現した、というまさに歴史の中心だったのですが、復活されてからのイエス様は、鍵をかけた部屋にスーッと入ってきたり、エマオでの出会いのように、そっと寄り添うように現れたかと思うと、弟子たちに話しかけ、やっと弟子たちが、それがイエス様だとわかったら消えてしまう、という不思議な行動をとられます。このエマオの話も、使徒言行録を書いたルカによって書かれたお話ですので、弟子たちの目から見えなくなる、という表現も、何か、「キリストの時」から次の時代、「教会の時」へと移行しつつあることを指しているのではないだろうか、と思います。

「教会の時」とは、次の日曜日に祝う「聖霊降臨」という出来事によって、イエス様に代わって、聖霊が弟子たちの共同体である教会を導いて下さる時代ということですが。今日の使徒言行録1章11節で天使のような人が「ガリラヤの人たち、なぜ天を見上げて立っているのか。あなたがたから離れて天に上げられたイエスは、天に行かれるのをあなたがたが見たのと同じ有様で、またおいでになる。」と言っています。このまたおいでになる時までが、教会の時であって、救いの業が完成する時なんですね。

祈禱書の175ページ、下から4行目、聖餐式の第1の聖別文ですが「み子が再び来られるまでこの祭りを行ないます。」と唱えますが、それは教会の時がその時まで続くことを表しているのです。

さて、「見えなくなる」というのは、とても不安なことのように思えます。天に昇るイエス様をずっと見つめていた弟子たちを、今日の特権では「みなしご」みたいに表現しています。しかし、エマオで、パンをさく姿でイエス様とわかった弟子たちは、そのあとイエス様が消えてしまうのに、「わたしたちの心が燃えていたではないか」と言って、エルサレムへとってかえし、弟子たちとそれぞれの体験を分かち合う場面が書かれています。

復活を疑ったトマスも、復活のイエス様と出会い、「わが主、わが神よ」と信仰を告白します。「見ないで信じる者は幸いである」ということを言われ、彼はそれ以降、見えないイエス様の存在、そして見えない天国と信じて、インドまで伝道したわけです。

「教会の時」というのは、この、「イエス様を自分の目では見ないけれど、神様の豊かな愛情を感じられる者たち」、つまり、ヘブライ人への手紙の11章1節の「信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです。」という言葉信じている者、クリスチャンの時代ということでしょう。それは、生活のあらゆる場所で、『神様の恵みを感じる時代』と言ってもいいのではないかと私は思います。

皆さんは、日頃の生活で、イエス様は目に見えないのだけれど、神様の恵み、神様の力を感じることはありますか？

私は2008年、今から9年前ですが、フィリピンへ行った時、大変聖書の言葉、イエス様を身近に感じたことがありました。その時のことを教区報にも書いたと思います。

フィリピンの首都マニラから、もう一度飛行機に乗り、南西に約700キロ。1時間飛んだ、パラワン島という島に行っただけです。空港から小さなバスに乗ってさらに90キロほど西にある、ナラという村が、ワークキャンプの場所でした。

村では、早速歓迎の夕食の食卓に着いたのですが、すると私の足元に一匹の子犬が走ってきました。食べ物を求めて来たのでしょう。その時、鮮やかに聖書の言葉が私に迫ってきたのです。「子供たちのパンを取って、子犬にやってはいけない。」と言うイエス様と「主よ、しかし食卓の下の子犬も、子供のパン屑はいただきます。」という女性の会話です。(マルコ7章・マタイにも並行記事)。

そして、そのあと食卓に、今度は、犬の料理が出されました。これにもビックリです。

使徒言行録10章では、天から、大きな布でできた入れ物が降りてきました。中には、いろんな動物が入っていて、ペトロのところに降りてくる幻の話が登場します。そして、空腹なペトロに、それを屠って食べるように、声がする話です。

「主よ、とんでもないことです。清くない物、汚れた物は何一つ食べたことがありません。」と言うペトロに「神が清めた物を、清くないなどと、あなたは言うてはならない。」という天からの声がする話です。犬の料理を見た時、その言葉が思い浮かびました。

その後、具体的な作業の話の中で、受け入れ役の司祭は、「明日から三日間で礼拝堂を建てる。」と説明しました。私の頭には、マタイ26章の「この男は、『神の神殿を打ち倒し、三日あれば建てることができる』と言いました。」とイエスを訴えた男のことが思い出されました。

半信半疑で翌日から作業が始まったのですが、水を汲むのに、井戸を何度も使ったことが、印象に残りました。トイレで流すために、一日に何度も井戸での水汲み作業をするのです。また、夕方は、西の空が夕焼けに染まったこと、など聖書の話と重なって来るんです。但し、マタイ16章2節では、

『「あなたたちは、夕方には『夕焼けだから、晴れだ』と言い、16:3 朝には『朝焼けで雲が低いから、今日は嵐だ』と言う。このように空模様を見分けることは知っているのに、時代のしるしは見ることができないのか。』』

という言葉で、夕焼けは、晴れを約束してくれるのですが、残念ながら、次の日は雨でした。このあたりは貿易風という東からの風が強いので、東の空で次の天気を予想しなければならなりません。西にきれいな夕焼けがあるからと言って、翌日は晴とは限らないのです。

そんな素朴な生活をしながら、三日目にできあがった礼拝堂は、日本人の目には、粗末なものに映るかもしれませんが、常夏のフィリピンの風景に似合う、何の無駄もない、木と竹と椰子の葉でできた美しいものだったのです。

これらの聖書を身近に感じる出来事が、2000年前でもないし、イスラエルでもない、日本から近いフィリピンで目の前に展開されているのです。そして、おそらくこのような風景は、日本でもほんの数十年前までは、あちこちで見られたことではなかつたらうか、と思うのです。

聖書の言葉はそれくらい、身近なものだったのです。そして、現在も世界の多くの所で体験できることのように思います。ところが、あれから9年余り。あの時は、聖書の言葉が敏感に感じられたのに、どうして聖書の言葉が身近に感じられなくなっているんだらうか、と私は疑問に思ったわけです。

そして、思い浮かんだのが、旧約聖書の預言書アモス書8章11節に出てくる言葉です。

『11:見よ、その日が来ればと／主なる神は言われる。わたしは大地に飢えを送る。それはパンに飢えることでもなく／水に渇くことでもなく／主の言葉を聞くことのできぬ飢えと渇きだ。』という言葉でした。

以前の口語訳では、「主の言葉を聞くことのできないことである。」と表現していました。

アモスが活躍していた時代は、イスラエルは南北に分裂していましたが、ダビデの統一王国時代の再来のように国は繁栄していました。ところが、人々は目に見える利益のことだけ追求するようになり、不正をして何とかしてもっと富を蓄えようと、神様を畏れることを忘れてしまったのです。

何となく、現在の世界で行なわれている、自分の国の利益だけを考えている政治家やそれを支える事業家などのことが頭に浮かびます。

現代の日本もやはりそんな世界になってしまったのではないか。フィリピンでの生活は、実は数十年前には日本でも、あちこちに見られたし、そこでは、目に見えない、人間の道徳とか配慮し合う共同体の優しさがあったのに、それが失われてしまった。それが、あの国に行ったら、再発見できて、それを私の日常生活に取り戻すことが、自分に課せられた課題ではないか、そんなことを9年前にも書いていましたが、まさに今それを感じさせられるのです。

今日は、イエス様が救い主キリストとして昇天されたことの意味を考えたのですが、日常生活の中に、目に見えないけど、神様の息吹が感じられるようになること、それがキリストの時が終わって「教会の時」なんだ。

そのことをもう一度思い出すことから、始めなければならない、と思ったことでした。